

## 能登半島地震被災地ボランティア兼現地調査

去る2月25日(日)から5日間、能登半島地震被災地へ赴き、ボランティアを兼ねて被災地の様子を見てきたのでご報告いたします。金沢市にベース基地を据えて、七尾市、門前町、志賀町、能登町、輪島市に行きました。石川県は、能登半島が日本海に突き出るように南北に長い形をしています。この為、金沢市から被災現地までは、80 kmから100 kmあり、併せて幹線道路が傷んでいるため、片道3時間から4時間を要します。津波被災とは異なる現状があり、東日本大震災とは異なる支援が求められている様にも感じています。



### (被害の様子)

- ・半島の大動脈といえる高速道路が陥没や隆起によって、痛みが激しい。
- ・海岸の隆起が著しく、漁港が使えない状態。
- ・家屋は、全壊もあるが、半壊なども多く、「住めなくもない」という、判断が働く様子が見られる。

(被災者の声) わずか数人ですが「言葉のかけら」を紡ぎ、その「振る舞い」を重ねて得た学び

- ・ここの人たち(地域住民)の気持ちを支えたいだけ。(指定避難所管理者)
- ・ここを離れたくない。家が潰れるときは、私の人生が終わるとき。(80代女性被災者)
- ・あと10年しか生きられない。家の修理に多くのお金は掛けられない。(80代女性被災者)
- ・ボランティアに対する拒否的態度と、「活動は『自己完結で!』」の張り紙。(指定避難所)
- ・この集落を離れる人は誰もいない。(70代男性被災者)
- ・知らないところに行くなんて考えられない。(70代男性被災者)
- ・炊き出しは、お母さん達を楽にしてあげたいから、やってもらいたい。(指定避難所管理者)
- ・15年、20年の地域づくり活動が、この災害で役に立った。(指定避難所管理者)
- ・衣料・食事中心の支援に留まらない「生活」を支える支援(CSR等)(自然食品商店主)

### (民生委員児童委員)

- ・被災地の避難所では、多くの場合、地元自治会関係者が中心になって運営されていた。
- ・地元の方を行政がサポートしている構図(石川県4日交代・三重県津市7日交代等々)
- ・民生委員児童委員の姿は、いたのかも知れないが、見えなかった、活動の様子が伺えなかった。

### (感想)

- ・衣食住の場面で多くの支援者が活動し、支援物資などに注目が集まる。しかし、様々な生活上の困難を有する被災者に対する相談・支援の姿が見えてこない。←民生委員児童委員の出番

東日本大震災(津波・原発)vs能登半島地震から見てきた現状

(東日本大震災)

(能登半島地震)

- ◇指定避難所/応急仮設住宅での避難生活→→→被災住宅での避難生活
- ◇短い時間での選択と決定→→→同じ構図
- ◇地域住民リーダーの献身的な活動と地域愛→→→同じ構図
- ◇支援を受ける能力(受援力)→→→被災地の地理的条件でバラツキが大きい



最も特徴的なのは、「在宅避難者」の多さ!=支援が行き届きにくい

こんな中において見えてきた地域住民の力

- ◇様々な制約の中において、地元住民は支え合って乗り越えようとしている。
- ◇被災者を支える地元リーダーの想いや工夫は、今回の災害で突然生まれた訳ではない。
- ◇こうした住民の災害との向き合い方は、「地域力」そのものではないだろうか。

こうした、住民の想いや工夫を支えるのが、本来の『住民主体の被災者支援』ではないか。



我々は、惨害記録と哀話のみ綴っているべきではない。暗い話ではなく、根強く再興していく**日本人の力**に着目し、次の被害を少しでも軽減するために、細心の注意を怠らぬように導いてゆくの、我々のなすべきことと信じている。(山口 1943)